

博士論文 概要書

会沢正志斎の研究

A Study of AIZAWA Seishisai

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻 地域研究
日本研究・日本歴史論

関 口 直 佑

本稿では幕末水戸藩の学者である会沢正志斎を研究対象とし、本論は三部構成となっている。第一章と第二章からなる第一部では、会沢の思想形成期と題し、『新論』執筆までに至る会沢の学問的背景と、当時の国際情勢に関する認識について考察する。続く第二部は会沢の思想発展期として第三章から第五章を当て、主として『新論』執筆以後における会沢の著作を用い、その思想的深化と教育者としての実践について論じる。そして最後の第三部では、会沢の思想展開期として岩倉具視と元田永孚を取り上げ、両者と会沢の思想との関連性について分析する。各章の概要は以下の通りである。

第一章では、『新論』で語られた国体論を分析するために最初にその学統、及び先行研究で議論のある諸学派との関係性について考察していく。それらの中で水戸学と徂徠学や崎門学との関係については、尾藤正英氏をはじめとして多くの研究者がその影響を主張している。一方で水戸史学会を中心とする研究者においては、徂徠学についてはその影響を否定し、崎門学については肯定的に記している。そこで本稿では会沢、及び幽谷が直接的にそれらの諸派の学問について記した史料を含めて論じ、それらを起点として推測を試みることにした。そうすることで諸学派と会沢の思想における断片的な齟齬を清算し、その学問的原点から見つめ直す意義を提供することを意図した。そして第二節では、藤田幽谷と大田錦城について分析し、考証学的要素を含めた両者の関係性について述べた。これを踏まえ続く三節では荻生徂徠、及び山崎闇斎の言説と会沢のそれとを直接比較し、両者における一致点と相違点を分析し一定の結論を導いた。そして四節では、これまで『新論』執筆以前の論考として注目されていなかった会沢の「喪礼」についての思索を検証する。そうして、そこに示された「追孝」における意義を確認しながら、会沢独自の思想的傾向と『新論』へと連なるであろう祭祀観について論じる。また同節では、丸山真男氏や遠山茂樹氏により主張されている封建的身分制擁護論の可能性について触れ、それに反証するかたちで論を進めることとする。これに付随して丸山氏や、本郷隆盛氏らによる会沢の思想における「愚民観」の存在についても述べ、「孝」との関連性においてその真意を纏めてく。

第二章では、上山春平氏等も主張する『新論』に込められた対外危機意識についての度合い、及び具体的な内容について論じていく。そのために先ず水戸藩における海外への関心の経緯から起筆し、同藩から蝦夷地探索へ派遣された木村謙次の記録を用いて、会沢まで継承されたであろう国際観を見ていく。続けて藤田幽谷の国際的視野の分析を行い、最終節ではそうした意識を学んだ会沢が当事者となった天津浜上陸事件での記録を通じて、それを契機とした危機意識が如何なるものであり、『新論』へと結実したかを考察していく。そこでは特に従来の研究で述べられているような、会沢の「先入観」が大きく作用したがための思想といった前提ではなく、彼が国際関係論におけるリアリズムの側面を有していたと仮定して論証していくこととしたい。

第三章では、会沢の著作の中で儒教研究の著作群である「思問」編を中心に考察を行い、その影響関係を探ることとする。本章は全六節からなり、それぞれ『中庸』、『孝経』、『論語』、『書経』、『易経』、『周礼』について、会沢が各儒書について考察した著作を用いて分析を行う。会沢の儒教研究著作について全体の概要を纏めたものとしては、これまで今井宇三郎氏の論考が唯一のものであったが、近年においては『中庸釋義』や『讀論日札』に

ついでの研究も行われている。そこでこれらの研究に依拠しながら、会沢における儒教の存在について、特にその中でも、如何なる儒書を重視し、またその解釈における特徴について一定の結論を見出すこととしたい。

第四章では、会沢の教育思想に着目し、その具体的政策、基盤となる思想について論じる。ここでは特に、会沢における『周礼』の影響を中心に述べていき、『周礼』に記された教育論が会沢によりどのように咀嚼、実践されたかを考察したい。また、その教育思想の背景には会沢の歴史観も作用しており、これは水戸藩における『大日本史』の編纂や、藩校弘道館の教育理念とも相互に関係しているとする仮説を検証することとしたい。他方で、会沢と共に後期水戸学の双璧とされる藤田東湖の教育思想にも触れ、両者の共通点と相違点についても考察しつつ、最終節ではそうした会沢の教育論の深化が、どのように熟成したのかを『下學邇言』を主として論を進めていきたい。

第五章では、会沢の思想と国学の関係性について論じていく。そのために先ず、水戸藩における国学との接点について先行研究を踏まえて纏め、幽谷の国学観についても触れていく。次に「国儒論争」における会沢の立場を中心として分析し、関連著作を用いて、これまで先行の研究では指摘されなかった新たな側面を提唱していきたい。最後に「国儒論争」でも争点の一つである「道」の解釈について、これまでの議論を踏まえて会沢独自の視点を検証していくこととする。

第六章では、常に維新政府の中枢にあった岩倉具視について取り上げ、『新論』に記された思想との関係性を述べていきたい。ここでは特に岩倉の建言書に加え、政策遂行上配置されたブレーンであり、『新論』にも造詣の深い長谷川昭道に着眼し、岩倉の諸政策との関係を論じる。また、岩倉の道德思想について、教育思想を基点として考察し、会沢のそれとの共通項についても触れながら、実際の『新論』等の会沢の著作と併記しつつ総合的に論証したい。

第七章では、青年期に会沢個人に深く私淑し、近代教育思想の礎でもある教育勅語の策定に参加した元田永孚を扱う。ここでは、『新論』の国体論が明確に元田の胸中に存在し、また会沢と同様『周礼』についても理解を深め、晩年までその思想を保持していたとする論拠を提示していきたい。また、このことは単に元田個人の思想に止まらず、明治天皇の侍講、教育勅語の起草といった経歴を加味するならば、近代思想における会沢の存在意義を再度見直す契機となると考えられる。続く終章では本稿の総括と会沢の社会科学的側面を踏まえ、今後の課題について述べていきたい。